

めでいかすどる  
Médicastre



「祭りの賑わい」

鶴岡地区医師会

18年12月号

『 排尿障害診断治療の実際 』  
— 過活動膀胱を中心に —

山形大学医学部附属病院泌尿器科

富田善彦先生

人口老齢化が進む中、「排泄」に関する問題は医療・福祉のひとつのメインテーマとして考える必要がありますし、形はさまざまだと思いますが、医療関係者はすべてこの問題と取り組まざるを得ないわけです。脳血管疾患後遺症など重度の介護を必要とする患者さんはもちろんですが、実は多くの人々が「排尿」についての症状も持ち、悩んでいます。その中で最も多い悩みは、尿の回数が多い「頻尿」です。

2003 年に排尿機能学会による約 1 万名の 40 歳以上の男女を対象とした排尿に関する本邦における疫学調査の結果が報告されました。この結果からは実に約 810 万人が、いわゆる「頻尿」の症状を中心とした以下に述べる「過活動膀胱」であると推定されました。

ところで「頻尿」と一口に言っても、回数が本当に多いのか、回数が多くて尿量は少ないのか、糖尿病や尿崩症のように尿量自体が多いために回数が多いのか、など病態の把握が簡単ではありません。さらに、いわゆる「頻

尿」を主訴とする場合だけでなく、尿意切迫感や尿失禁、夜間尿も重要な訴えとなりうることも明らかになってきました。この病態の整理のために、International Continence Society (国際禁制学会)では 2002 年から過活動膀胱(over active bladder/OAB)の概念を世界的に提唱し、症状に基づいた診断と、それに基づいた有効な治療法を行うこと推進してきました。2005 年には日本排尿機能学会において、過活動膀胱診療ガイドラインが作成・出版され、日本においても「過活動膀胱」を適応症とした薬剤が発売されるなど、「頻尿」の治療は大きく変化してきています。

過活動膀胱の原因は非常に多彩で、時に泌尿器科専門医の診断治療が必要となることがあります。その多くはアルゴリズムに従い診断・治療を進めていくことで可能です。本講演では、この「過活動膀胱」の診断治療についてポイントを抑えながらお話ししたいと思います。

## 第 25 回庄内医師集談会

日時：平成 18 年 1 1 月 26 日（日）

場所：3 階講堂

学術広報部 部長 中 村 秀 幸

去る 1 1 月 2 6 日に第 2 5 回を迎える庄内医師集談会が当地区の当番で、センター講堂で開催されました。

私は、学術担当理事ということで、集談会の代表幹事を務めさせていただきました。伊藤末志先生、三科武先生を始め、諸先輩の暖かいご指導と事務方の方々の支援をいただき準備を進めて参りました。



最近、開業医の先生の演題が極端に少なく、当初はつらつとして新鮮な

雰囲気希薄な傾向で何とか打開したいとの思いがありました。今回鶴岡の方では、五十嵐裕先生や斉藤憲康先生、三原先生などの演題を提出していただき、一般演題は 18 題でした。セッションの割り振りがうまくいかず座長の先生にはご苦勞をおかけしました。しかし、全体としては病院の演題とのバランスも比較的よかったかなと感じています。

運営に関しては、発表時間をあまり気にしない先生もいらしたり、白熱した討論で時間が大幅に遅れてしまったりと、恒例とはいえ反省しています。興味深い発表も多く、確かに 6 分の発表時間では不十分な印象もあります。発表や討論時間の見直し、スライドの枚数制限の撤廃、抄録はメールでも可にしてほしいなど、いろいろ貴重な意見をいただきました。今後の運営の参考にしてまいります。

後半に企画した、医療連携パスのシンポジウム



は、各演者のまとまりのある、よく練られた発表、フロアからの熱心

な討議であつという間に予定の時間となりました。中目会長の名座長ぶりも光り、非常に有意義なものになったのではと、自画自賛しております。今回の企画にて酒田での連携パスの機運と現在の具体的な進捗状況がよくわかりました。酒田では、病院の糖尿病の専門医を中心とした開業医とのネットワーク作りから、まずは診療レベルを底上げする原動力としたいとのこと。強調されていたのはやはり、キーステーションとなる基幹病院の情熱を持ったリーダーの存在と、それを支える関連スタッフ、それを取り巻く各医療機関の顔の見える関係のようです。その背景にはやはり、日本海病院と市立酒田病院との合併問題が透けてみえます。

鶴岡では、庄内病院の整形外科、田中先生を中心に、湯田川温泉リハビリテー



ション病院と協立リハビリテーション病院との運営形態の異なる病院同士のパスから運用が始っております。鶴岡では何と言っても、三原先生が IT を活用したスムーズで風通しのよいパスに進化させくださっております。今後の両地区の連携パスの発展を期待しています。

## 外部評価委員会について

鶴岡地区医師会

会長 中 目 千 之

12月3日、午前9時より本地区医師会としては、はじめての試みである外部評価委員会が開催された。厳しい医療環境の中にあっても成長し続ける組織を目指し、外部の声を聞く組織、外部の声に変わる組織、外部の声に主張できる組織をモットーに開催された。委員は、筑波メディカルセンター理事長 中田義隆氏、同事務局次長兼副院長 鈴木紀之氏、荘内銀行頭取町田 氏、横浜労災病院院長 藤原研司氏、山形市立病院済生館館長 平川秀紀氏（紙上参加）、尾形サービス商会取締役 尾形昌彦氏の6名で構成され、1ヶ月前に資料を各委員に配布し、事前にメールで質問を受け準備をした。当日の会では、各委員に「評価」と「提言」を柱としたご発言をお願いした。当方は、理事、役員のほか職員 名も同席し質疑に参加した。

### 議題；（1）各施設の運営についての評価

健康管理センターの件費が48.6%は高すぎる。山形市の検診センターでは39.6%（平川）、筑波メディカルセンターでも30%台である（鈴木）。老朽化、狭隘化の問題と受診者の待ち時間の改善が必要（尾形、実際に受診してみても）。湯田川病院では原価計算、ABC分析の導入（平川）、コスト削減委員会の設置（鈴木）。筑波メディカルセンターでは専任の削減担当者を配置している（鈴木）。

会計全般では会計が見づらく、一般会計を経由する繰入方法が会員にわかるのか？

管理会計は部門収支に配賦したほうがいい（尾形）。

### （2）医師会の組織体制と人材養成について

この規模になれば人事管理、財務管理をする中枢機能が必要（尾形）。

現在の総務部が統括的な仕事を担当すればよ

い（町田）。本部は肥大化し、権威的になるので本部制を導入する場合はこの点を考慮（町田）。人材養成は職務の段階において体系だった研修を行う。新入社員教育、中堅社員教育、新任管理職研修（コーチングや考課者訓練）など（尾形）。職員一人ひとりに研修費を貼り付けて研修させ、研修の査定は厳しく行いモチベーションにつなげている（中田）。

### （3）講評：町田頭取より

経営全般の考え方、人材の養成、評価のあり方などについてこれまでの経験をもとにお話をいただいた。

### （4）給与制度と人事考課等について

現在の給与体系は年功序列化しすぎており、職務給を考えるべき（町田）。

寒冷地手当は平成22年に廃止となっているが、前倒しし、これを原資に評価に連動した給与体系を考えたらどうか？（尾形）。

評価結果を給与に反映するのは、離職につながるのでは、現在の賞与だけでいい（中田）。

単年度成績主義のみでは職員の不満が高くなるので、単年度目標管理とキャリアアップに向けた成長の目標管理の両面が必要（中田）。

人事考課では、評価者機能制度を導入して評価者の育成をしないと現在の360度評価方法は機能しないと思われる（尾形、鈴木）。

当センターでは人事考課のための目標が年度初めに上司と本人との間で話し合われており、到達度も両方で明確にされている（中田）。

人事評価に関する委員会を立ち上げ、「評価者の研修体系」「評価反映が賞与だけでいいのか」等他企業の例を参考に、職員のモチベーションの向上につながる賃金体系、評価方法を検討していくべき（尾形）。

以上、各委員からだされた主たる提言をのべた。これまでは、医師会という特殊な、あるいは特異な土俵で運営が行われてきたが、これからは会社として企業として経営、運営をしていかなければならない時代に入ったということを痛感した。外部評価委員会は開催することが目的ではなく、優良企業としての組織に生まれ変わるための出発点としなければならない。

(文中 敬称略)。





## 決意あらたに！27名緊張の載帽式

日時：平成18年11月14日（木）13:30～

場所：3階講堂

今年で48回を迎えた載帽式。練習中にろうそくの灯を持ったまま倒れられたハプニングがあって、教務も学生も緊張した式でした。祝賀会で2年生が実習の場面を再現した寸劇は1年生に今後の学習に更なる誓いを持たせることができました。以下は載帽式を迎えられたことを素直に書き表した感想文です。

### 五十嵐 茉由

初めての載帽式を迎えて、よくここまでこれたなあと思いました。入学したころはここまで来れるのかすごく心配でした。しかし、アツというまに半年間を乗り越えることができたとりあえず、本当に良かったです。

また、これから始まる実習に向けての気持ちを高めることができました。この半年間以上に大変になるのだろーと思いましたが、実習を乗り越えるためにも、一番に体調管理をしっかり行わなければならないことを自覚しました。看護する立場として本当に大切なことなのだと思います。健康に元気よく実習できるように頑張ります。

最後に看護の道に進まなければ迎えることのない載帽式を今日迎えることができ、本当に嬉しかったです。まだまだ自分が身につけた基礎看護技術は未熟で、ナースキャップを載いていいのか不安な部分もありますが、載いたからにはこれからたくさん身につけていけるよう頑張っていきたいです。

### 金内 麻美

入学してからやっと半年が過ぎて、ようやく載帽式を終えることができました。本当に感動して泣きそうになりました。今までの学校生活の事や看護師になると決めてから仕事を辞めたり、家族に納得してもらったまでの様々なことが思い浮かんできて、ようやくここまで来たことにホッとしました。でもこれからが本当の厳しさが待っているのだと思いました。自分で決めてこの道を進んでいるのだから、必ず最後まで目標に達するまで、頑張ろうと改めて思いました。弱気になった時は今日の日のこの感動を思い出して行きたいです。もう少し若かったら親にも載帽式を見せてあげたかったです。ナイチンゲール誓詞も自分を含めて他人任せなところがあったけれども“ただ言えばいい”という考えから少しずつみんなが変わって、式にふさわしく立派に言いたいと思って取り組めたことがとても嬉しかったです。本番は一番の出来だったと思います。



# 訪問看護ステーションハローナース10周年

## ハローナース 10周年に思うこと

湯田川温泉リハビリテーション病院

デイケア室科長 佐藤 ゆき子

訪問看護ステーションハローナース開設 10周年おめでとうございます。

去る 11月17日(金) グランドエルサンに於いて 10周年記念祝賀会が行なわれ、中目会長や齋藤前会長による開設までのいきさつ等・初代地域福祉センターなえづ所長の齋藤昭子さんからの祝辞・土田副会長による乾杯のあいさつ・スライドによる思い出コーナー・中目会長の見事な手品披露・北朝鮮の美女(美男)軍団に負けず劣らずのハローナース職員の踊り・中目会長と土田副会長を泣かせてしまった花束贈呈など、盛りだくさんな内容で、10年前にタイムスリップしたようでとても楽しく懐かしいひとときを過ごすことができました。

平成8年5月地域福祉センターなえづの中に開設し、当初所長だった私を含め、看護師4名、新人事務員1名の計5名のスタッフでスタートした職員も今では21人の大所帯となりました。場所も手狭になり地域福祉センターなえづから今の旧NTT寮だった所へ移転しました。

地域福祉センターなえづにいた時は社協の職員の皆さんに毎日暖かい声をかけて頂き、齋藤元所長さんには母親のように面倒を見て頂き安心して勤務することができとても感謝しています。又、ここでの社協の皆さんとの出会いはとても貴重なものになっており、今の職場でも役に立っていますし、一生私の宝物になることでしょう。

10年を振り返ると、いろいろなことがありました。24時間連絡体制での当番で、夜12時頃温泉の越沢まで死後処置に行ったこと。利用者の家族にお説教され、1時間正座させられたこと。大吹雪の中命がけで訪問に行ったこと。家族に性の悩みを打ち明けられ困ったこと等……。今

思うとどれも懐かしい思い出です。

在宅で過ごしている医療依存度の高い利用者にとって、自宅で安心して生活するには訪問看護は不可欠です。これからも訪問看護を必要としている利用者のために今後もハローナースの職員には体に気をつけてがんばって欲しいと思います。

終りに、利用者をご紹介下さり、ハローナースを支えてくださった医師会の先生方に感謝を申し上げると共に、ハローナースの益々の発展を願っています。



ハローナース開設時職員

## 訪問看護での出会い

訪問看護ステーション ハローナース

所長 長谷川 典子

早いもので訪問看護ステーションハローナースがスタートして10年がたちました。私は平成9年1月に健康管理センター検診課より異動で訪問看護ステーションに勤務しました。地域福祉センターなえづ内に事務所があり、とても新しい建物で気分よかったです。それとは反対に建物の周りはまだ開発整備途中で主要道路は砂利道で訪問車がガタガタと横揺れ状態、あげくに大型ダンプから煽られたり、初回訪問では道に迷ったりまた、違う家にお邪魔したりと訪問の行き帰りは気合いをいれて運転していました。当時は在

宅サービス自体がまだそれほど普及していなく、鶴岡市のなかでも田舎方面だと、福祉を利用すること事態御法度の風習？があり、社名入りでの訪問車で来られると困るといわれた家庭もあったようでした。いろんな家庭があり、家族背景があり、その中で利用者にとって必要な看護をどのように提供できるのか、たくさんの利用者、ご家族と出会いを通して、訪問看護は利用者を取りまくさまざまな環境等を考慮した上での看護体制を整えなくては難しいことを教わりました。それと、訪問看護を通じてさまざまな主治医の先生方にも出会うことが出来き、在宅療養を続けるには、主治医との関わりがとても重要視されていることを実感しました。これまで訪問看護を続けてこられたのも、たくさんの人たちと出会い、「ありがとう」という感謝の言葉を頂くたび、訪問看護をされていてよかった、明日もがんばろうという思いになれたのだと思います。在宅で安心して老後過ごしたいと希望される方の力になり、より自分らしく生きていきたい方のお手伝いをこれからもサポートしていきたいと思っています。

これまで私たちを支えてくださった中目会長先生はじめ、現在の担当理事でもあります、土田副会長先生、並びに諸先生方及び職員の皆様には本当に感謝致しますと同時に、これからも引き続き宜しくお願い致します。

## 10周年を迎えました

### ハローナース 佐藤和佳

平成8年4月に「地域福祉センターなえづ」を拠点とし、5人のスタッフでスタートしたハローナースは、今年で10年目を迎える事ができました。

開設当時の「なえづ」の周囲は道路も舗装されていず建物もまばらで、目の前の道路で行なわれていた行事に参加させていただいたことはとても楽しい思い出です。

訪問看護ステーションは開設されましたが、私達4人の看護師は訪問看護の経験が殆どなく、当初は全てが不安だらけで手探り状態の毎日でし

た。その上なかなか訪問看護の依頼がなく、不安は募るばかりでした。そんな時、中目先生から待望の紹介を頂き、皆で大喜びしたことを覚えています。この方は、「どん兵衛きつねうどん」が大好きで、あつという間に完食される方で、家族の方にも大切にされ、いつも私達の訪問を心待ちにしてくれていました。

その後は順調に利用者も増え、在宅を取り巻く制度や環境も変わり、ハローナースのスタッフも約3倍まで増えました。そして、訪問看護より沢山のことを学び、沢山の貴重な経験をさせて頂く事ができました。家の中に他人が入る。という事に対しては誰もが抵抗があると思います。私達はそんな思いを配慮しつつ、少しでも利用者のQOLを向上し、家族の方の介護負担が軽減できればという思いでこれからも訪問していきたいと思っています。

また去る11月17日には、グランドエルサンに於いて、10周年祝賀会が盛況に行なわれました。これまでの写真を見ながらのナレーション、思い出話、エピソード、余興、歌など内容は盛り沢山で、懐かしい人達とても楽しい一時を過ごすことができました。中目先生の「マジックショー」と「UFO」は大盛況でエンターテイナーとしての素敵な一面を見せて頂くことができました。

そしてハローナースは、これからも10周年、20周年を目指して頑張っていきたいと思っていますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。



現在のハローナース職員



# マイペット&マイホビー

- 第40回 -

## 趣味は焚き火

真 家 興 隆 (鶴岡協立病院皮膚科)

かきねの かきねの まがりかど  
たき火だ たき火だ おちばたき  
「あたろうか」「あたろうよ」  
きたかぜびいふう ふいている  
異 聖歌 (昭16)

大昔、人は焚き火で暖をとり、猛獣から身を守ってきた。それが潜在意識にあるのか、ヒトは火を見ると、何ともいえぬ安らぎと畏敬を感じるようである。大文字焼きに大勢の市民が見入り、若草焼きに、毎年、十数万の人出があるのも、そのためであろう。

ところで近頃、焚き火をとんと見かけなくなった。特に平成13年、ダイオキシン対策として、所謂、野焼き禁止令が施行されてからは、なお更である。家庭ではオール電化が進み、ガスも装置の中で燃えるのみ。今時、人が火に親しむ機会は少ない。

## 山 焼 き

ところが鶴岡では、今でも天を焦がさんばかりの盛大な焚き火が出来るのである。それは山焼き。

小生、この十年ほど毎年、湯田川温泉隣りの田川集落で、焼き畑赤蕪栽培に参加している。赤カブは杉の腐葉土を好むので、焼き畑は前の年、杉を伐採した山で行われる。

山焼きは八月中旬の好天を見計らい、火がよく見えてコントロールし易いよう、夜に行く。午前零時を期し(消防署に届けた時刻)、山主が山の斜面の上端で火をつけると、赤蕪栽培に参加する集落の人達が、その火を次第次第に、麓に向かって焼き降ろす。草や灌木は予め刈って乾燥させて



山 焼 き 風 景

あり、また、伐採した杉の大枝小枝が沢山あるため、火はバリバリと盛大に燃える。

夜のうちはよいが、朝になり、やがて真夏の太陽が昇ってくると、下からは炎にあぶられ、上から陽に照らされて、文字通り炎天下の作業。山焼きは、なかなかの重労働である。焼き終わる頃には「へトへトだが、”これで1年分の焚き火をやった。”と、一種、爽快な気分になる。

## 赤蕪栽培

山焼きが終わると、その日のうちにカブの種まきである。だいたいが急な斜面なので、均等に蒔くのが難しい。

しかし、蒔いてしまえば、後は収穫まで何もすることがない。病虫害を起こす菌や虫の卵は、きれいに焼殺されているし、雑草の種も同様。肥料は杉の木が、伐採されるまで百年かけて降り積もらせた杉葉の腐葉土である。

また、赤蕪は連作を嫌うので、翌年、同じ場所にカブ作りは出来ない。その山には次の年、集落の人たちが、お礼奉公で杉苗を植える。それ故、同じ山で赤蕪栽培するのは、百年後、杉が大きく育って伐採される時となる。

まとめれば、田川の焼き畑赤カブは、”同じ山からは百年に一度だけ採れる無農薬、無化学肥料の有機作物”となる。

## 赤蕪漬

八月に蒔いたカブは、山に霜が降りる11月に収穫する。それを病院1と評判のカブ漬名人、I婦長の指導で漬けてみた。暗紫色のカブを酢に浸すと、サーッと鮮紅色に発色する。何か、中学校の頃の化学の実験を思い出す。桶に入れ、河原で拾った石を適当に乗っけておくと、3週間で立派な赤カブ漬が出来た。

その後、毎年カブを漬けているが、最近では師匠のI師長、”私よりも、お上手です。”と、ほめてくれる。

## 赤蕪ランタン



赤蕪ランタン、育ち過ぎの赤カブでつくる。

赤蕪漬に適するカブは、大きさがLLサイズの温州ミカンほど。それより大きくなると、味が落ちる。そのため、時期になると集落の人たちはこまめに山に入り、選って採集している。しかし、小生の収穫は1シーズン1度のみ。どうしても育ち過ぎが出てしまう。大方はそのまま山に置き捨てるが、形の良いのを選んで、ランタンを作る。

まず、カブの中身をくり抜く。次いで、色のついている外皮の部分を、好きな模様で薄く彫り取ればランタンができる。中にロウソクを入れ、火を灯すと、これがなかなか綺麗なのだ。

今年はイノシシでも彫ってみるか、など思ったりした。(2006.11.18)



我が家のペット達

## 私のお勧めの店

その 14

横山 靖

今回は魚にしようと思ったが、さておいしい魚料理のお店はと考えるとこれが困るのである。それはおいしい店がないということではなく、それどころか魚のおいしい店がたくさんありすぎるからだ。何といても庄内浜の魚はうまい。うまくて新鮮なのだから、どこで食べたてうまいのだ。まして刺身や塩焼き、煮付けなどはそれぞれの家庭で食べる味が一番といえるかもしれない。それで考えたのだが今回はおいしい店を紹介するより、この時期のおいしい、そして私の好きな魚を紹介しようと思う。それに庄内でも、意外と魚のことは知らない人が多いのだ。

さて、私がこれからの時期に一番楽しみなのは、ナメタガレイの煮付けである。このナメタガレイは正式名称はババガレイといわれる。庄内の一部では泡立ちガレイとか泡吹きガレイとか呼ばれる。ナメタガレイのナメタは滑多という漢字が当てられ、ババガレイのババは婆さんという意味、泡立ちは読んだごとくで、それぞれこのカレイの特徴をそれぞれうまく表している。つまりは表面は茶色の斑点が目立ちあまりきれいでなく、泡を吹いたようにヌルヌルしている、まったく見栄えのしないカレイである。しかし、このカレイが煮付けにするとうまいのだ。もう、うまいなんてものではない。その白身はしっとりして、潤いがあり、その肌理の細かさは尋常ではない。しかも煮付けの汁とは完全にしっぽりとなじむ相性の良さである。もうこれだけで驚いてしまうおいしさだが、皮と身の間の部

分など、コラーゲンたっぷりてまさにトロトロ状態なのである。さらに縁側にいたっては、書いていてもヨダレがでそうだが、もう口の中で完全にとろけてしまう。まさに溶けてなくなるとはこういうことをいうのだ。それにしてもぱっとしない外観とは大違いで、醜いアヒルの子もビックリのうまさである。もう煮付けに関しては、このナメタガレイを食べてしまっってはもう他のカレイは食べられない。それにしても、こんなにしっとりの美白の食べごろ美女に、ババとはまったく失礼な話である。また煮付けといえば、翌日の煮ごりも大きな楽しみだ。何せコラーゲンたっぷりの魚だから、そのコラーゲンの染み出した煮汁はプリプリに凝縮している。それを熱いご飯にかけるとふたたび溶け出し、そのままご飯とまぶして食べれば美味この上なしである。まさにナメタガレイはこれからのおいしい時期だが、宮城や三陸の方では正月にはナメタガレイの煮付けを食べる習慣なので、どうしても12月は相場でも値が上がるのが残念だが、ぜひともみなさんに食べていただきたい逸品である。



## 表 紙

### 「祭りの賑わい」

桜井 晋

庄内三大祭りの一つに数えられている“犬祭り”の一コマです。尻ハシヨイに脚半姿で、保育園児が慣れない手つきで毛槍を振る可愛い姿に沿道の人達も思わず微笑みました。

他に「奴振り保存会」の方々の指導を受けた中学生が毎年行列の先頭に立って奴振りを披露している。

### ～ 編集後記 ～

伊藤末志

忘年会を兼ねた各種学会、研究会も終わりに近くなりました。開業医も同様でしょうが、勤務医にはこの時期1年の集大成とも言えるべき研究報告が待っており、忙しさが増します。当地区医師会担当の第25回庄内医師集談会は診療所からの発表が増加し、本来の姿に戻りつつありますし、シンポジウムでは「医療連携パス」が取上げられ大変意義ある会になりました。シンポジストの皆様ご苦労様でした。

今月始めには、当地区医師会の外部評価委員会が開催されました。初めてのことであり、医師会役員および担当職員は相当緊張していたようですが、無事終わることができました。委員会前日には外部評価委員の一人である筑波メディカルセンター理事長の中田義隆先生の「筑波メディカルセンターの歩んできた道・これからすすむべき道」と題した講演があり、講演の後半では「地域医師会と連携した小児救急医療」のお話がありました。地域医師会からは現在11名（45歳～70歳）の小児科単科標榜医と内科・小児科標榜医が、平日の準夜（22時まで）に毎月1回小児救急医療の支援を行っているとのこと。いずれも地域医療支援病院の登録医だそうです。ちなみに庄内病院の登録医には小児科医はおりません。医師会からの支援の効果としてはセンター小児科医の負担軽減だけでなく、医師会の先生方との相互理解、研修医などへの接遇教育などをあげておりました。

今、全国的にも小児医療（および小児救急・新生児集中治療）の集約化・重点化計画の策定が進められています。また、当地でも休日・夜間診療所の小児救急を含めた運営についての検討がなされているところです。庄内病院には庄内地区に1箇所のNICUが認可される予定になっております。その時は庄内病院で現在行われている夜間小児救急体制の維持が困難になるのは目に見えています。小児に限らず診療時間外の一次救急医療も「かかりつけ医」が担う、ごく当たり前のことをやっていけないのかを考える来年になりそうです。

それでは皆様良いお年を。

編集委員：中村秀幸・伊藤末志・斎藤憲康・五十嵐裕・福原晶子・岡田恒人

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail tsurumed@mwnet.or.jp

URL <http://www.mwnet.or.jp/~tsurumed/>

印刷所：富士印刷株式会社 鶴岡市美咲町27-1 TEL 22-0936(代)